

小児科

■理念

少子化問題が語られるようになって久しいが、多くの国民の専門医指向が高まる中、小児科専門医の需要も高まっている。小児科で扱う疾患は各領域にまたがり、急性疾患から慢性疾患まで範囲が広い。また、小児疾患は年齢に特有の特徴を有し、その後の成長・発育にも大きな影響を及ぼす。さらに、状態が急速に変化することが多く、症状の変化を適時、的確にとらえ、迅速に対応する知識と技術の取得が必須である。学校生活や保護者との対応に対しても十分な配慮が要求され、コメディカル・院内学校教員・病棟保育士・ボランティアまでを含めたチームとしての全人格的医療の提供が必要である。

京都大学小児科では、出生前から成人に至る全課程を総合的にとらえ、成育医療の視点に立った医療を実践できる幅広い臨床能力と豊かな人間性を持つ小児科専門医の育成を目指している。大学附属病院と関連病院が一体となり、小児科専門医養成プログラムを作成し、各分野における最高水準の医療を推進するとともに、それにあたる人材の育成、確保に努めている。

小児科医のキャリアを長期的視点から見た場合、一般的な小児科医療実力に加え、より専門性の高いサブスペシャリティー医療の実力を身に付けて行く必要がある。この為、専門性の高い診療を行っている大学病院と基幹病院での研修を通じ、サブスペシャリティー学会専門医の取得を奨励している。加えて、未来に向けた新しい医学を創造し、新しい情報を発信するため、大学院教育を充実させ、臨床に根付いた医学研究を行う人材の育成にも力を入れている。

■小児科臨床研修コース

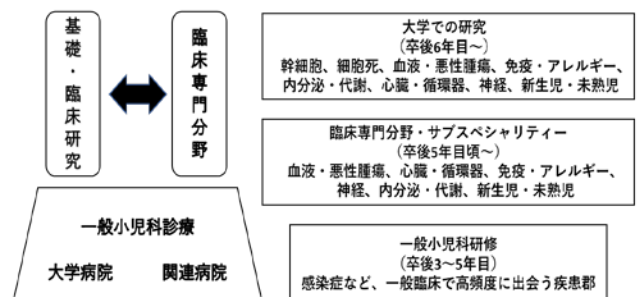
1. 概要

- ・ 卒後1～2年：各施設のプログラムに沿いスーパーローテート研修を行う。
- ・ 卒後3～5年：小児科専門研修プログラムに沿い、大学及び関連病院で研修を行う。
- ・ 卒後6年～：卒後6年目を目途に小児科専門医資格を取得する。
各分野（サブスペシャリティー）の専門医を目指し、大学院や大学病院、及び関連病院にて、基礎研究・臨床研究・臨床研修に努める。

2. 学内での研修方法

- ・ 病棟では、(A)ローテーター、(B)専門研修医、(C)医員・大学院生、(D)助教・講師、の組み合わせを基本とした診療体制をとり、臨床グループ単位（血液・悪性腫瘍、循環器、神経、免疫・アレルギー、代謝・内分泌）で綿密な症例検討を行っている。
- ・ 外来では、担当医師のもと診療を研修する。
- ・ NICUでは、指導医のもと受持ち医として診察・診断・治療方針を学ぶ。毎日全症例についてカンファレンスを行っており、受け持ち以外の症例からも多くを学ぶ機会がある。

小児科研修の全体像



■初期研修1年目

小児の診察に慣れ、基本的手技に対する恐怖心をなくす。
病児を全人的に理解し、病児・家族（特に母親）と良好な人間関係を確立する。
2ヶ月以上ローテートする場合、指導者のもとで基本的手技（の一部）を施行する。

■初期研修2年目

総合診療としての小児科の基本を経験・体得する。指導者のもとで小児特有の症状や検査所見に応じた診断、治療のプロセスを学び、理解できる（例：輸液、栄養、抗菌剤の選択、呼吸管理、薬物療法）。指導者の下で診察、基本的手技ができる。
看護師やコメディカル・院内学校教員・病棟保育士・ボランティアまでを含めたチームとしての小児医療の在り方を理解する。
ローテート期間に応じ、1～2ヶ月のNICU研修を選択科目として行う。

■専門研修連携・関連施設

専門研修連携施設	関連施設グループA	関連施設グループB
静岡県立こども病院 大津赤十字病院 宇治徳洲会病院 北野病院 大阪赤十字病院 天理よろづ相談所病院 日赤和歌山医療センター 兵庫県立尼崎総合医療センター 倉敷中央病院 神戸市立西神戸医療センター 神戸市立医療センター中央市民病院	静岡県立総合病院 静岡市立静岡病院 彦根市立病院 公立甲賀病院 高島市民病院 三菱京都病院 赤穂市民病院 福井赤十字病院 京都桂病院 日本バプテスト病院 国立病院機構京都医療センター 医仁会武田総合病院 洛和会音羽病院 済生会中津病院	滋賀小児保健医療センター 国立病院機構南京都病院 国立循環器病研究センター病院

■小児科医のキャリアプラン

